

# 内科医 つれづれ草

高山浩一

実家に帰ると、今でも母親から私の仕事について尋ねられます。一般に医師といえは、多くの方は病院に勤務して診療しているイメージをお持ちでしょう。しかし、診療以外のことをしている医師も意外に多いのです。

## 教育病院

私の母親の話に戻ると、病院にはいつ出ているのかと聞くので、週に1日だけ出ていると答えて、母親を不安にさせています。「よくそれで生活できるね」と。もちろん残りの4日を遊んでいるわけはありません。夜の8時前に帰宅できることなど、めったにないくらいです。医療の現場では、働き方改革の議論は遠い世界の話です。私は大学から教員として給料を頂いているので、仕事は何かと問われたら、医学部の学生に呼吸器内科学を教える教員ということになります。母親の中では、教員と医師のイメージがどうにも重ならないようです。

厚生労働省のような行政で働いている医師もいれば、専ら研究ばかりしている医師もいます。それぞれに必要な仕事であり、医師だからこそできることも多いのです。医学部の学生を教育する上

## 社会に役立つ医師に



イラスト・山本重也

で、実際に学生と一緒に患者さんを問診したり診察したりすることは、大事な実習の二環です。そのため、医学部には病院の併設が必要であり、当然ながら大学病院は「教育病院」としての顔も持っています。そのことは、外来や病棟にも明示されています。ただ、患者さんが教育病院であることを意識するのは、大学病院に入院したときでしょう。

主治医のほか若い研修医が点滴にやったり来たり、時には医学部の学生が話を聞きに来たりします。病棟回診では、研修医や学生がそろそろと教授について回ります。普通の病院ではあまりお目にかからない光景です。もちろん入院の際に教育病院であることを説明し、了解を得てはいるのですが、煩わしく思う方もきつとおられるでしょう。回診の際に肺音の異常が聞こえたら、患者さんをお願いして学生にも聞かせていただくのですが、極力患者さんのストレスにならないよう配慮しています。果たして私の教育は彼らの中で実を結ぶでしょうか？ 毎年の卒業式では、これから巣立っていく彼らの晴れやかな顔を見ながら、社会に役立つ医師になってくれと心から念じています。彼らの医師としての力量は、取りも直さず私の教える力を測る物差しでもあるのです。

(京都府立医科大学教授)